

まことと会便り

2018/6

みなさま、いかがお過ごしでしょうか？

裏面にも書きましたが、今年の春季永代経法要には真宗学寮理事長の高松秀峰師にご登壇頂きました。今、私たちが人間として生きさせて頂いて仏法を聴くことが出来ること、有り難さを詳しくお話し下さいました。その中で私たちは他と比べなければ自分の様子が分からないものだとお話になりました。確かにそうです。平日があるから休みの日がラクに感じます。苦しみがあるからそれを超えたら喜びや楽しみも感じます。しかしその比べることが煩惱や欲を生み出す原因でもありません。どちらかといえば「足る」よりも「足らない」方ばかりを見てしまします。どうしても私たちが人間は苦を生み出すことから逃れることはできないようです。

しかし、諦めたものではありません。その苦しみがあるから仏法を求める気持ちが生まれるのだといえます。苦しみがあるから求めるし、言葉を知り操ることが出来る人間だからこそ仏法のご縁に遇うことが出来る。人間に生まれたこのご縁の時間を空しく過ごすことのないよう、との戒めでもあります。

行事予定



六月 十五日 ヨガの会

毎月第一水曜日と第三金曜日に開催中

七月 四日 ヨガの会

七月 十三日 まことと会 夏法座

講師 住職

七月 二十日 ヨガの会

八月 十三日 光圓寺 盆法座

初盆をお迎えになるご家庭に

ご案内をお送りいたします

帰敬式（きぎようしき）と法名

親鸞聖人が伝えてくださった「南無阿弥陀仏」を依よりどころに生きてゆく第一歩として受けさせていただく儀式、それを「帰敬式」といいます。「帰敬式」を受けますと「釋○○」という法名をいただきます。「釋」の文字は、お釈迦さまの弟子（仏弟子）としていただく名前です。よく法名と戒名を混同されている方がいらっしゃいますが、浄土真宗では「法名」です。戒名は、厳格な規律（戒律）を守って修行する人々につけられる名前です。それに対し、浄土真宗では、戒律の一つも守ることのできないこの私たちを、必ず救い浄土へ迎えるという阿弥陀如来のはたらきを「法」と呼び、その法の中に生かされている私たちがいただく名前を「法名」といいます。

「法名」は本願寺で帰敬式を受け、ご門主から生きている「今」法名をいただくのが本来の形です。本願寺では午前、午後の一日二回、ほぼ毎日、帰敬式が行われています。京都へお参りされるのが難しい方のために、広島別院の報恩講の初日（十二月十四日）午前に毎年行われています。

生前に住職が法名をつけることはできませんが、帰敬式を受けていない方がお亡くなりになった時は住職がおつけします。

【春季永代経法要 坊守覚え書き】

*仏法とはお釈迦様が悟りを開かれたように仏となることを目指す法。再び迷いの世界へ生まれたいよう、苦しみの六道から離れるため。

地獄・・・自分がしてきたこと全てを償い続ける世界

餓鬼・・・飢えや渇きなど全ての欲望が満たされない世界

畜生・・・生きるため何でもする世界

修羅・・・争いの世界

人間

天上・・・何でも思い通りになる世界だが死ぬ(終りがある)



いま自分がいる世界がどういう世界なのかなかなか分かり難いが、他の世界を見てみると分かってくる。地獄など、もがき苦しむ世界では仏法を聞く余裕などない。反対に天上で満たされすぎても仏法を求める気持ちが起こらない。六つの世界の中で人間界が一番仏法を聞くことができるであろう。

生きては死ぬを繰り返しながら、六道の中を繰り返しままようことを輪廻といえます。地獄の世界にいたかも知れない、修羅の世界にいたかも知れない、その私が人間に生まれたことはありがたいご縁なのです。この人間界に生を受け、如来さまの前で仏法を聞かせていただくことが出来ることは尊いことなのです。

しかし、私たちがお釈迦様のような修行が出来るかといえそうではありません。それどころか、この人生の中で悟りを開かんとするためにどれほどの時間を費やしているのでしょうか。どれだけの努力をしているのでしょうか。思えばお恥ずかしいばかりの私たちです。



そんな私たちをそのまま掬い取って、仏としてやろうと言ってくださるのが阿弥陀如来です。それをそのまま受け取ることが聞名であり、仏願の生起本来を聞くことなのです。

「南無阿弥陀仏」の声となって私たちが一人一人に向かって届けようと仕上げてください。ださっているにも関わらず、受け手の私たちが自分自身に向いていると思わなければ、それは途端に受け取られなくなり。他の誰かのためでなく、私一人に向けた教えであると受けとめなければなりません。何の仏法の取り柄のない愚かな者が愚かなまま救われていく道こそが「南無阿弥陀仏」